

## す かた しそう 住まい方の思想

いま よ な もじどお かいしゃく い へや  
居間という呼び名を文字通り 解釈すれば、“そこに居るための部屋”であ  
り、リビング・ルームは“生活する部屋”である。それじゃあ、料理してい  
るとき だいどころ い しんしつ ね とき せいかつ  
る時は台所に“居ない”のか、寝室で寝ている時は“生活していない”の  
か、と言えばもちろんそんなことはない。しかし 逆に、居間とはなんのため  
へや と かせ ひとこと こた むずか いま りょうり  
の部屋か、と問い返されると、一言で答えるのは 難しい。居間は“料理す  
る”とか“寝る”という風に分節化し得る生活行為のための場所ではないか  
らだ。まあごく通俗的に言えば、“団欒のため”という答え方があるが、こ  
だんらん ことば いちばめん しらじら  
の“団欒”という言葉はホームドラマの一場面のような白々しさがあつて、  
くさ ちかごろ なか からくち  
どうもインチキ臭い。近頃ではテレビの中でさえ、いわゆる辛口ホームドラ  
まばやりで、え か かぞくだんらん め  
絵に描いたような家族団欒などにはめったにお目にかかれなく  
だんらん ふくすう にんげん たの さ  
なった。団欒とは複数の人間が楽しそうにおしゃべりしていることを指す  
いま もくてき おも かんが  
のだろうが、居間がそれだけを目的にしているとは思えない。ちょっと 考え  
わか いま ひとり しんぶん よ つめ  
てみればすぐ解ることだが、居間では一人で新聞を読んでいることも、爪を  
き ふうふ よ  
切っていることもあるし、夫婦で酔っぱらっていることだってあるのだ。

じゅうたく れきし たてあなじゅうきよ さかのぼ かんが  
住宅の歴史を堅穴住居まで 遡って考えると、はじめにすべての  
せいかつこうい ひと へや おこな じゅうきよ ちょうり すいみん  
生活行為が一部屋で行われた住居があつて、そこから調理、睡眠などの、  
じしん わ こうい へや つぎつぎ ぶんり  
それ自身としての分かれやすい行為のための部屋が次々と分離していき、そ

あと のこ こうい ひ う いま い あと  
の後に残った行為すべてを引き受けているのが居間なのだと言えよう。後に

のこ ぶんせつか え こうい ふくごうたい ひとこと な  
残ったのは、分節化され得ない行為の複合体だから、一言で名づけようがな

とうぜん こうい い あら い  
いのが当然だ。そういう行為をあえて言い表わしているのが“居る”とか

せいかつ ことば  
“生活する”という言葉なのだろう。

じゅうきよ なか いま し いち もくてき そ しつ  
しかし、住居の中で居間が占める位置が、それぞれの目的に沿った室を

ひ さ よはく い はんたい  
引き去った余白のようなものであるかと言えば、むしろその反対であろう。

じゅうたく せつけいしゃ はっせいろんてき じゅんじよ ぎやく いま ちゅうしん  
住宅の設計者はたいてい、発生論的な順序とは逆に、居間を中心に

じゅうたく かんが しゅうい ここ もくてき へや はいち  
して住宅を考え、その周囲に個々の目的をもった部屋を配置していく。

じょうしきてき てじゅん せつけいしゃ じしん  
これはあまりにも常識的な手順になっているので、設計者自身もとくに

いしき おお てじゅん なか ひと かくじつ しそう  
意識はしていないことが多いが、その手順の中には一つの確実な思想が

せんざい ふくすう にんげん かぞく きょうどうたい ひと じゅうきよ  
潜在する。それは複数の人間が家族という共同体をなして一つの住居

く とき かぞく きょうどうせい きずな りょうり  
に暮らしている時、その家族の共同性の絆となっているのは、料理する

ね ふう ぶんせつか え こうい ふくごうたい  
ことや寝ることではなく、そんな風に分節化され得ぬ行為の複合体である、

かんが かつ  
という考え方だ。(後略)

(渡辺武信著『住まい方の思想』中公新書より)